**台風が日本列島全域に雨をもたらし、ところによっては被害出ました。自然の中に生きる私たちは自然の中に生かされているということすら忘れ、私たちの力を超えた自然を支配しようと考えてしまいます。私たちの力を超えた自然の力を正しく恐れ、また創造主であるあなたへと心を向け自分は今あなたの恵みによって生かされているという謙遜さを持つことができますように**

**9月になりました。これから少しずつ気温が下がり過ごしやすくなって行きます。この夏ひとりひとりの健康が支えられこのように礼拝が守られてきたことを感謝いたします。しかし同時に孤独や虚しさに苦しみ辛さを抱える者もおります。どうか私たちが心を一つにして祈りあい、キリストのもとにある平和と癒しの中に生きることができますように**

**世界各地で何か月も何年も続いている紛争をどうぞあなたが終わらせてください。なぜ人間はここまで平和を築くのが下手なのでしょうか。自分にだけ平和があると考え相手を攻撃する愚かさをどうか世界全体で学ぶことができますように。そして私たちの日常生活でも私たちが自分の正義に酔いしれることなく聖書をとうして自分の罪を見つめ、正しくキリストの平和を求めて行くことが出来ますように。**

**私達と離れた場所で暮らしていらっしゃる赤羽姉妹を、山本倫太郎兄弟をお守りください。**

**礼拝になかなか来ることのできないカリーナさんを、支えてください。**

**人々の反応**

**ナザレのイエスとは何者なのか。**

**これが、主イエスを見た人たちに問われた大きな謎だった。**

**この謎は、主イエスの十字架の後にも残された。**

**ゴルゴタの丘で十字架にかけられ処刑されたイエスは、一体何者だったのか。**

**それは、主イエスの死後何世紀も議論されたことだし、今でも、すべての人が問われていることだ。**

**「2000年前に、十字架で殺されたイエスという青年は、あなたにとってどういう存在なのか」**

**聖書は、この世のすべの人にそのことを問いかけている。**

**主イエスは仮庵の祭りの中で、ご自分のことを命のパン、命の水であると大声で人々に叫ばれた**

**主イエスがご自分のことを安息日やこの祭りを超えた存在であること示されたことで、人々は様々な反応を示した。**

**エルサレムの群衆の中には「この人は本当にあの預言者だ」という人、「この人はメシアだ」という人たちが出てきた。**

**そのように、主イエスを信じる人もいた一方で、「メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか」と言って、信じない人たちもいた。**

**特に、ユダヤ人の指導者たち、聖書の言葉に精通している人たちは、主イエスがガリラヤ地方のナザレ出身であることを理由に、メシアであることを否定した。**

**そもそも、メシアは誰も知らないところ、誰にも知られずに来ると考えられていた。**

**しかしイエスはガリラヤ出身でヨセフとマリアの子であるということを皆知っていた。**

**ナザレのイエスは神からの預言者またメシアのようにも思えるが自分たちが伝え聞いてきたメシアの条件に当て嵌まらない。**

**エルサレムの人々は困惑した。**

**ヨハネ福音書**

**福音書はイエスという方のことをどう描いているだろうか。**

**どこから来られた方として証しているだろうか。**

**確かに、旧約の預言者たちは、メシアがどこから来るのか、ということを様々に預言している。**

**旧約聖書の預言書ミカ書ではメシアはベツレヘムから来ると預言されている。**

**イザヤ書にも、「異邦人のガリラヤに光が差し込む」と預言されている。**

**しかし、それらは地上的な意味においての出身地のことだ。**

**預言者たちがそもそも伝えてきたのは、天にいらっしゃる神ご自身がやがてメシアとして地上に来られる、ということだった。**

**このヨハネ福音書でもイエスが天の父のもとから送られた方であると証されている。**

**主イエスは何度も「天の父が私をおつかわしになった」とおっしゃっている。**

**イエスは何者であるか、ということが人々の間に議論を引き起こし、人々は分裂していった。**

**ナザレのイエスは律法の破壊者なのか、神の権威を持ったメシアであるのか。**

**ユダヤ人の信仰を惑わせて神の礼拝から人々を引き離そうとしているのか、それとも、律法の言葉、預言の言葉を実現させようとしているのか。**

**ガリラヤのナザレ出身の大工なのか、神から遣わされた、天の力と権能を持った方なのか。**

**手ぶらで戻ってきた警備**

**そのような人々の困惑の中、主イエスを逮捕しに行った下役たちは、手ぶらで戻ってきた。**

**彼らを遣わしたファリサイ派の人たちは、「どうしてあの男を連れてこなかったのか」と驚いた。**

**下役たちの答えはこうだった。**

**「今まで、あの人のように話した人はいません」**

**下役たちも、主イエスの教えを聞いたのだ。そしてイエスがメシアであるということを否定することができなかった。**

**ユダヤの指導者たちでさえ、主イエスの教えを聞いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と驚いたぐらいだ。**

**彼らもそうだった。**

**もしナザレのイエスがキリストだったとしたら・・・自分たちはメシアを捕えようとしているのではないか、と下役たちは恐ろしくなったのだ。**

**報告を聞いたファリサイ派の人たちは怒った。**

**彼らは、自分たちと違う人たちはすべて間違っているという考えを持っていた。**

**自分たちこそ聖書を、律法を正しく解釈しているという自信をもっていた。**

**ファリサイ派の人たちは、律法に詳しくない一般の人たちのことを見下して、「律法を知らない群衆は呪われている」とまで言っている。**

**メッセージ**

**このような姿勢が、天から来られた神の子を十字架へと上げることになっていく。**

**私たちは考えたい。**

**自分の理解と違う人たちは、間違っている、という極端な考えは、実は誰もが陥ってしまう信仰の罠ではないか。**

**使徒パウロを思い出したい。**

**まだパウロがサウロと呼ばれていた頃、キリスト者を迫害した。**

**自分が学んできた聖書の理解と異なる人たちを牢に送り込む活動をしていた。**

**パウロは迫害に熱心だった。**

**それは自分は正しい、自分がやっていることは神のみ旨にかなっている、と信じ切っていたからだ。**

**パウロは手紙の中でこう書いている。**

**「私は生まれて八日目にイスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の儀については非の打ちどころのない者でした」**

**ファリサイ派の一員であったパウロは自分が非の打ちどころのない正しさを持っていることを確信して、迫害していたのだ。**

**同じように今、主イエスを全く受け入れようとしないファリサイ派の人たちは、パウロがサウロであった時と同じ熱心さで否定している。**

**自分の信仰が正しくて、他の人たちの信仰は間違っている、という姿勢を貫くことで、皮肉にもファリサイ派の人たちが一番神のメシアの姿が一番見えていないのだ。**

**自分こそ一番神の御心に近いところにいると思っているのにと、実は一番遠いところにいた、ということは、笑い話のようなことだが、実は信仰者が簡単に陥る罠ではないか。**

**それを本当に教えられるのは、キリストとの出会いだ。**

**パウロは復活のイエス・キリストから「なぜ私を迫害するのか」と声をかけられて、自分がやっていることが神の御心に反していることを知った。**

**パウロは言う。**

**「私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに、私はすべてを失いましたが、それらを塵芥と見なしています。」**

**私たちも、同じことが言えるのではないか。**

**自分の力で得て来たもの、勝ち取ってきたものが、キリストとの出会いのすばらしさには叶わない、と思わされる瞬間があるだろう。**

**それこそが人を新しくするのだ。**

**ニコデモの言葉**

**ファリサイ派の人たちは、「議員やファリサイ派の人々の中に、あの男を信じた者がいるだろうか」と言った。**

**その言葉を受けて、ニコデモという人が発言した。**

**「私たちの律法によれば、まず本人から事情を聴き、何をしたかを確かめた上でなければ、判決を下してはならないということになっているではないか」**

**この人は三章に出てきたイスラエルの教師だ。**

**ニコデモもファリサイ派の一員だったのだ。**

**主イエスのことを何も聞こうとも知ろうともせずに有罪にしようとしていた。**

**実はこれこそ律法に反しているのだ。**

**しかしニコデモの仲間たちは聞く耳を持たなかった。**

**「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことがわかる。」**

**イエスがどんな教えを説いているのか、どんなしるしをおこなっているのか、ではなく、イエスがガリラヤ出身だからメシアではないのだ、と言い切っている。**

**彼らが主イエスを否定するのは、ガリラヤ出身であるという、ただそれだけのことだった。**

**イザヤ書の預言に「異邦人のガリラヤ」という言葉がある。**

**それほど、ユダヤ地方の人たちから見てガリラヤ地方というのは中央から遠い場所だったのだ。**

**エルサレムの人たちからすれば、むしろ外国に近い、国の端っこ、という意識があったのだろう。**

**そのような言い方をされたら、ニコデモも黙るしかなかったのだろう。**

**しかしニコデモの中に一つの大きな疑問が残った。**

**律法に反しているのは、神の御心に反しているのは、ファリサイ派なのか、イエスなのか。**

**ニコデモは、他のファリサイ派の人たちとは何かが違っていた。**

**ニコデモが他のファリサイ派の人たちと違うのは、一度主イエスに会い、時間をかけて言葉を交わしたことがあるということだ。**

**３章にその時のことが書かれている。**

**ニコデモは夜、誰にも知られないように、特に、同じファリサイ派の人たちに知られないようにひそかに主イエスのもとを訪ねた。**

**「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言われたニコデモは、「どうしてそんなことがありましょうか」と主イエスに向かって繰り返した。**

**主イエスが何をおっしゃっているのか、わからなかったのだ。**

**あの夜以来、ニコデモは主イエスがおっしゃった言葉を自分の中で繰り返し思い出し、吟味してきただろう。**

**あの方は私に何を伝えようとなさったのか。**

**ニコデモは時間をかけて主イエスを求め、近づこう、理解しようとしてきたのだ。**

**このことが、ニコデモを、他のファリサイ派の人たちとは違う道を行かせようとしていた。**

**私たちは、この後、ニコデモが十字架のキリストのもとに立ち返るのを見ることになる。**

**預言者はガリラヤからも出る**

**ファリサイ派の人たちは一つ忘れていた。**

**ガリラヤからは預言者は出ない、と彼らは言っているが、そんなことはない。**

**旧約聖書のヨナ書の主人公ヨナはガリラヤ出身だ。**

**主イエスの故郷のナザレの北数キロのところの出身だ。**

**ヨナはエルサレムの祭司ではかった。**

**ガリラヤ出身だ。**

**神がなぜガリラヤ出身のヨナをお選びになったのか、書かれていない。**

**ただ神の御心がそこにあり、ヨナが選ばれ、神の招きの言葉が託された、ただそれだけだ。**

**ヨナは神の召しにふさわしい預言者ではなかった。**

**ニネベに行けと言われるのに、船に乗って反対の方向に逃げようとするのだ。**

**仕方なくニネベに行って人々に神の言葉を伝えて、人々が悔い改めても不貞腐れるのだ。**

**ニネベの人たちが滅びるところを見てやろうと思っていたのに、神が裁きを思いなおされたからだ。**

**しかし、注意したいのは、私たちの目にはとても預言者・宣教者としてふさわしいとは思えないヨナを通して、神はご自分の救いを実現していかれた、ということだ。**

**選びの不思議**

**聖書を読んでいると、私たちは思う。**

**「なぜ神はこんな人をお選びになったのだろうか。」**

**ヨナのような人を預言者として選び出されたことも不思議だ。**

**ヨナ書を読むと、ヨナの思い・能力を超えて、ただ神の救いの御業が実現して行く様を見て取ることができる。**

**そもそも、なぜ神はご自分の愛する独り子を十字架の上へと召されたのか。**

**十字架のいけにえに、なぜ神の子が選ばれたのか。**

**神の選びは不思議に満ちている**

**教会の迫害者パウロ、主イエスのことを三度知らないと言ったペトロ、主イエスを見捨てて逃げ去った弟子たち・・・皆、神の御業の器とされるにはふさわしくない人たちばかりだ。**

**しかしこのような、キリストを見捨てた人たち、キリストを理解できなかった人たち、キリストを迫害した人たちが、不思議と用いられて、ユダヤからローマ帝国全域に至るまで福音を広めていき、神へと立ち返る人たちが起こされていくのだ。**

**イエス・キリストの十字架と復活の後、ヨナ書でニネベの人たちが自分たちの罪を知って神に立ち返ったように、ユダヤ人たちの中に悔い改めが起こった。**

**そして、宣教者としてふさわしくない人が使徒とされ、福音が世界へと広まっていく。**

**結び**

**そして何より不思議なのは、今自分がキリスト者として召されているということではないだろうか。**

**自分がキリストにふさわしいかどうかということを考えたときどうやっても自分はキリストの許しに釣り合う人間だと思うことは出来ないだろう。**

**聖書を読むとどうしてこんな人だと思う人が神の御業のために召されている。**

**しかし振り返って自分のことを考えるとき、私たちは自分こそどうしてキリスト者として召されたのだろうか、と考えるのではないだろうか**

**使徒パウロは手紙の中で書いている。**

**「私は神の教会を迫害したのですから使徒たちの中でも一番小さなものであり使徒と呼ばれるねうちのないものです。神の恵みによって今日の私があるのです・・・働いたのは実は私ではなく私と共にある神の恵みなのです」**

**私たちは必要以上に自分を卑下する必要はない。**

**私達と共にある神の恵みを信じ委ね、イエスキリストによって生かされているものとしてこの世を生きて行きたいと思う。そのことが私たちに託された証しの使命なのだ。**